

海外子女教育

10

2022 No.596

特集2
個性派書店の
魅力

今月の顔
長澤 葵さん
ヘアメイクアップアーティスト

受け入れ校紹介
聖ドミニコ学園中学高等学校

海外校シリーズ
バルセロナ日本人学校
アトランタ補習授業校

特集1
現地校に入っ
て





学校前の広場で学校全体のイベントがあったとき

「いっしょにローラーブレードをしたり、かくれんぼをしたり。日本とそんなに変わりません」

自然に溶け込んでいた様子がわかります。では、いまふり返って、デンマークに行つてよかつたと思うことは何でしょう？

「自分の中にその自由さがちよつと入つたことです。それまでは心配性で、なんでもきつちりしないとダメな性格だったのですが、少し緩んだかなあと思います」

コロナ禍で 会えなくなつた友達

一年半たつて日本に帰国します。日本を出発したときは、「また同じ学校に帰ることがわかっているからさみしくない」と思っていたさうで

すが、四年生になつて戻ると完全に「同じ」ではありません。

「担任の先生が違うし、仲がよかつた子が入れ違いで海外に行つてしまつていて、緊張しました」

そして、帰国後すぐにコロナで休校になつてしまいました。

「五年生になつて学校が再開すると、私だけでなく、みんなが久しぶり！という感じでした」

現在でもデンマークの友達とは連絡を取っているさうです。

「最初のうちは、いつでもスマホとかで連絡が取れるし、夏休みに会いに行けると思っていました。でもコロナで行けなくて。いまは誕生日などにメッセージを送り合つています」

デンマークでは小・中学校は一貫ですが、高校では皆が違う学校になつてしまいます。だから「その前には会いに行きたいです」とのこと。寧々さんから、これから海外で学校に通うことを不安に思っている人にも、アドバイスをもらいました。

「海外に出るのは、最初は怖いかもしれないけれど、自分とは違う国の人たちに会つて、違う文化を知ることができるので、あとになつて自分にとつていい体験だつたと思えると思います」

親子で コミュニケーション を育む

フランス・パリ在住

なおこさん

現在パリ在住のなおこさんは、夫がフランスに赴任することが決まり驚いたさうです。仕事柄、駐在は想定していましたが、漠然と英語圏に行くと思つていたからです。

「渡仏当時、息子は五歳、娘は三歳、親子共にフランス語はまったく話せませんでした。そのため学校選びも悩みました。駐在が決まつた直後は、現地で子育てをされているかたにコンタクトを取つたり、学校の担当者のかたとお話をしたり、情報集めに奔走しました」

帰国子女としての経験を 子どもの学校選びに反映

じつはなおこさん自身も帰国子女で、〇歳から四歳までアメリカに、



世界遺産モンサンミッシェルで

小学三年から六年までの四年間は中国に住んでいました。

「アメリカにいたころの記憶はほとんどなく、中国では日本人学校に通つていたため、大学時代まで英語や語学には苦手意識がありました。でも大学で海外からの留学生に会つて気持ちが変わりました。彼らが日本のことをよく学んでいるのに、私は住んでいた国のことを何も知らないと恥ずかしくなつたのです。そこで、記憶がより鮮明な中国に留学する決意をしました」

そして大学二年のときの一カ月の短期留学を経て、大学三年生のときに中国の復旦大学に一年間留学しました。

「中国の授業では、頻繁にディベートやプレゼンテーションをするこ

とを求められましたが、日本ではほとんど経験がなかったのでたいへんでした。周囲の学生が積極的に発言するのを「すごい」と思いながら、語学ができるだけでなく、自分自身で考える、表現するということが大事だと思われました」

こうした体験が、パリでの子どもの学校選びにもつながりました。

「日本人学校も素晴らしいけれど、以前の経験から、居心地のよい日本人の枠のなかで生きてしまいたいという気がしました。フランス語力はゼロでしたが、親としても挑戦するために、現地のかたとのコミュニケーションを取る環境に、あえて身を置く選択をしました」

フランス語と英語 バイリンガルの学校へ

こうして選んだ現在の学校は Ecole Jeannine Manuel とい、フランス語をベースに、英語にも力を入れるバイリンガル校です。国語や算数などの授業はフランス語で行いますが、毎日英語のレッスンがあり、仏語と英語の比率は七対三くらいだそうです。

「学校を決めた理由は、多国籍な人が集まる環境や、高校のバカロレ

アの点数もパリでトップというレベルの高さ、比較的值ごろな学費などといったことも大きいのですが、最も大切にしたのは、夫婦共に学校のビジョンに共感できたことです」

当時五歳だった息子は、日本から英語でオンライン受験をすることにまりました。

「文字、数字、形の理解を問われたり、物語を聞いて質問に答えたりしました。そのあと親の面接がありました。」

娘はまだ現在の学校の就学年齢になっていなかったのですが、まずフランスの公立の幼稚園に入れることになりました」

こうしてパリでの生活が始まりましたが、コロナもたいへんな時期で、



息子さんの現地校の5日間の宿泊旅行で

小学校の一年生にあたるCPに入學後しばらくして、授業が二週間ほどオンラインになってしまいました。

「まだ五歳だし、フランス語のオンライン授業に集中するのは難しいことでした。でもフランスの学校では授業参観がないので、オンラインだと、どんなふうに授業しているのかなど、息子の様子がわかってありがたかったです。一方で、いかに授業のレベルが高いか、そして息子が理解してないのかも目のあたりにしました」

フランス語がわからない息子さんは、最初の1カ月は対面授業でも居眠りしてしまったり、フランス語を拒否してしまったりで、学校との個別面談が五回もあったそうです。



現地校での息子さんの誕生日会

「学校の先生は親身にフォローしてくださるものの、入試を受けるレベルの学校であるため、ある程度できることが前提」の部分もありました。私もフランス語を学んでサポートしていますが、学校以外に外部の家庭教師の助けを得る必要がありました」

息子さんの学校生活が楽しくなるように、なおこさん自身もさまざまな努力をします。

「友達づくりの一環として、誕生日にフランスのお友達を招いて、忍者の格好で折り紙の手裏剣を投げたりしました。また私自身が楽しくフランス語を勉強しているところを見せたり、下手でもがんばって交流しているところをいっしょに同席させたりしました。一方幼稚園の娘は、まだ小さいので求められるレベルも高すぎず、フランス語だけというところもあり、吸収するのは息子より早かったです」

コーチングとの出会いと 親子コミュニケーション の大切さ

「フランス語はひと筋縄でいきません」と苦勞しつつ、「なにより大

事なのは母国語だと思っています」と言うなおおさん。その思いの背景には日本での経験がありました。

「息子が二歳のころ、バイリンガル教育を目指して、日本で英語の保育園に通わせていました。でも当時は娘が生まれたばかり。夫は出張が多く、私も仕事で忙しく、時間的にも気持ちのうえでも余裕がありません。息子が日々どう過ごしているかにきちんと向き合えず、イライラして感情的に怒ってしまい、息子も情緒不安定になって、悩んでいました」その解決策を探っていたときに出会ったのが、「子育てコーチング」だそうです。

「オンラインで受講して、それまで子どもとのコミュニケーションや向き合い方について真摯に考えたことがなかったと気づきました。たとえば、それまでは親として子どもに何かさせなきゃ、しつけをしなきゃと焦り、あれしちやダメ」など子どもを否定するようなことを無意識に使っていたと気づいたのです。コーチングを通じて、もっと子どもを認め、話を聴き、共感して、考える力を育む質問を投げかけることを学びました。たとえば、子どもが牛乳をこぼしたとします。そこで、なんでこぼしたの、ダメでしょ！」と

怒らず、あ、こぼしちゃったね、どうやったらかぼさないでいられるかな？」と問いかけるようなことです。家庭の中でそのプロセスを整え、やる気上げると、子どもが使うことばも変わってくるのを実感しました」

英語よりも、まず母国語での親子のコミュニケーションの大切さを痛感したなおおさんは、息子さんを日本の保育園に移しました。

「やがて息子も笑顔になり、やる気が出てきたし、私自身も家族との信頼関係が深まり、自信を持って子育てできるようにになりました。英語は家庭で楽しみました」

文化の違いへの 気づきを促す

こうして日本で親子のコミュニケーションを取っていたことが、パリでも生きているそうです。

「日本に比べると、海外に行けばことばがペラペラになると思う人が多くいますが、それは違います。海外にいれば言語を習得できるわけでも、文化が理解できるわけでもありません。周囲の風景や音なども、意識的に見たり聞いたりしないと、気づかないで過ぎてしまふのです。」



娘さんが通った公立幼稚園の様子

だから親が気づかせる工夫をして、子ども自身の学びにつなげていくことが大切です。たとえば街なかで、いろいろな国のことばが聞こえるけれど、いま話している人のことばはなんだろうね」と子どもたちに聞いてみる。こうして息子も娘も、人の違いやマナーの違い、建物の違いなどに気づくようになったと思います」

海外駐在中の人たちのなかには、その国らしいことや、現地の人とのコミュニケーションができなかったと感じている人も多く、そう気づいたなおおさんは、コーチングスキルやご自身の経験などを合わせて、グローバル親子コミュニケーションプログラムを独自で企画し、幼少期の子育てをサポートしています。

一年の成長と これからのチャレンジ

こうしてフランス生活も一年がたちました。

「息子は親と離れて五日間の泊りがけの旅行がありました。パリの郊外へバスで行き、お友達と過ごす林間学校みたいなものです。日本人の感覚で、まだ一年生なのに大丈夫かなあと親の方がドキドキしました。息子も初めて親と離れるので、お風呂ひとりで入れるかな、おねしょしないかなと不安になっていたのですが、いっしょに解決策を考えました。でも当日は楽しそうに参加し、満喫して帰ってきて、成長を感じました。」

公立校に通っていた娘も、一年後にフランス語で受験をして、この九月から同じ学校に通えるようになりました」

パリ生活も新しい段階に入りました。

「今後、私たちはフランスから別の国に赴任する可能性もあります。場所も時期もまだわかりません。でもどこへ行っても、親子でしっかりコミュニケーションを取って、チャレンジしていきたいと思います」